



第 57 回土壌物理学会シンポジウム 「進化する土壌水分計測」

第 28 期土壌物理学会会長 長 裕幸

2015 年は国際土壌年であり、これを記念し 12 月には FAO から「Status of the World's Soil Resources」が発刊されました。著者の中には、日本からも元学会長の宮崎毅氏等が加わっておられ、「土壌」をキーワードとして、現在取り上げることができるトピックを網羅している大作です。世界中で、一体どれほどいるか分からない、土壌に関連する研究者達が、日夜、自分の研究テーマに真剣に取り組んでいる姿を思い浮かべることができ、自ずと共同体という意識がこみ上げてくる内容だと思います。このような世界的な連帯感は、研究の醍醐味でもあり、モチベーションの一つでしょう。

今回、この記念すべき年に、佐賀大学で土壌物理学会シンポジウムを開催できたことは、本当に有り難い機会であったと思います。遠いところから参加して頂いた 120 名を超える皆様方には、宿泊等でご不便をおかけして申し訳ありませんでしたが、とても感謝しております。

さて、今回の企画「進化する土壌水分計測」は、佐賀大で事務局を引き受けたときから考えていたテーマであり、九州では、2007 年に福岡で開催した際の「電磁波を利用した最新の土壌物理計測」の延長線上にあると位置づけていました。当時、最初に講演をして頂いた長崎大学の下町多佳志氏の「マイクロウェーブによる植物の環境ストレス適応応答検出の試み」は非接触型の土壌水分計測への展開が大いに期待される内容で、学会に参加していたゲイロンキャンベル博士も非常に関心をもたれ、事務局に「個人的に会談したい」と言ってきたことが思い出されます。残念ながら、下町氏は数年後にガンで他界され、その夢を果たすことはできませんでしたが、彼の意志とアイデアは脈々と引き継がれていると思います。

今回は、基調講演として、アリゾナ大学のマレックズブレイグ博士に来日して頂き、宇宙線中性子を測定して土壌水分を測定する装置について「Land-surface hydrology with cosmic-ray neutrons: principles and applications」と題して発表してもらいました。日本では、ほとんど知られていない装置であり、最新のトピックであったと思います。本シンポジウムのために、わざわざ佐賀まで来て頂いた博士には本当に感謝しています。今後、共同研究等で実を結んでいければと期待しています。

引き続き、日本から 3 名に講演をして頂きました。最初は、広く普及しているデカゴン社の製品について、アイネクスの三石正一氏による「Decagon 社の土壌水分センサーを上手に使うには」、次に、最近普及し始めた TDT センサーについて佐賀大学の宮本英揮氏による「デジタル TDT センサー実践活用」、最後に、大御所、鳥取大学乾燥地研究センターの井上光弘氏による「ユーザーから見た市販マルチセンサー（水分-塩分-温度）の評価」です。この 3 名の講演には、事務局として事前にリクエストをさせて頂きました。それは、「ユーザー側の立場から分かるように話して欲しい」と言った無茶な要求でしたが、講演者の方々は見事に成し遂げておられ、参加者の評判は非常に高かったのではないかと思います。

今回、本特集号においては、残念ながら講演者全員の論文を掲載するには至りませんでした。ぎりぎりまで努力していただいた編集委員および講演者の方々には、深く感謝しております。

最後に、講演会と総合討論会の両方の座長をして頂き、今回のシンポジウムを成功へと導いて頂いた、東京大学の西村拓氏には、心よりお礼を申し上げます。